

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26289214

研究課題名(和文)流動的居住に着目した集住地を継承する主体の養成に関する研究

研究課題名(英文)Forming the subject of inheriting a village from paying attention to the fluid habitation

研究代表者

山崎 義人(YAMAZAKI, Yoshito)

東洋大学・国際学部・教授

研究者番号：60350427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,100,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果として「住み継がれる集落をつくる」を出版した。概要は以下の通りである。

都市住民の移住・交流を受け入れつつも、集落の側に議論の軸足を移し、集落の空間・社会を持続していくために、集落を質的に転換しつつ、集落が住み「継がれ」ていくありようを描く必要がある。集落を「継ぐ」担い手の養成を、集落が戦略的に展開する必要がある。住んでいる人々が積極的に外部と連携して積極的に交流を展開することで、各自のご縁の量を増やして、住んでいる人々が減っても、集落の活動量(ご縁の量)を落とさないようにできるのではないかと考える。このことで、住み継いでくれる人が現れる偶発的な可能性を広げていけると考える。

研究成果の概要(英文)： We published a book as the result of the study, the title is "Making villages that were lived and inherited". The outline of the contents is as follows:

For the continuity of villages, it is necessary to draw the vision of villages to be inherited, changing villages qualitatively. It is necessary to keep people who inherits village strategically. We considered that the quantity of activities in a village could not be reduced if the living people would interchange positively. Then, incidental possibility of appearing a person who live in would spread.

研究分野：地域計画・まちづくり

キーワード：居住継承 集落 移住 交流 通い

1. 研究開始当初の背景

過疎地域においては限界集落や消滅集落という言葉が一般に普及し深刻な状況に立たされている。これは何も農山漁村集落に限ったことではなく、地方小都市の中心市街地などの衰退も顕著になってきており、国土保全を考える上で、これらの集住地の持続は重要な課題であり、対応方策を考えることが急務となっている。このとき、空き家を有効活用し新規居住者を招き入れることを契機として、地域の維持・継承を目指す事例が増えている。

2. 研究の目的

本研究では、兵庫県篠山市や、和歌山県紀美野町などを対象とし、「住まいの確保」「職業の確保」「コミュニティの支援」といった課題と、住み手、貸し手、コミュニティといった主体との関係から、集住地を継承する主体養成に資する要件を抽出することを目的としている。

3. 研究の方法

平成 26 年度：予備調査を行い、作業仮説の検証をして、住み手と貸し手の関係に焦点を当てた 1 次本調査を行う。

平成 27 年度以降：平成 26 年度の取りまとめを行うとともに、コミュニティの支援に焦点を当てた 2 次本調査をおこない取りまとめ、学術論文へと昇華させる。日本建築学会集落居住小委員会のメンバーを中心にさらなる研究的進展のための研究組織を構成している。地理的まとまり等から 4 つの研究グループとし、調査対象地を選定して研究を進める。

4. 研究成果

次のような考察が得られた。

1) 問い

わが国の総人口が減り始めて 10 年程が過ぎて、人々の地域に対する捉え方が大きく着実に転換してきている。とはいえ、人間の居住圏域は拡大してきた時の逆回しのように、縮小しては行かないだろう。この先の数十年で、人々は日本列島のどこにどのように住まい、暮らしを営んでいるのだろうか。都市計画学の分野では、シュリンクやコンパクトといった言葉によって、将来の地域のあり方の方向性をイメージさせることが多い。確かに、地方都市などにおいては一つの方向性として、人々を積極的に市街地に集めていくことで、地域再生を実現している事例も散見される。しかし、このような縮み方やその物理的な外形のイメージで、人々を集めるという方向性は、人口が減少し高齢化がますます進展していくわが国において本当に適切なのだろうか。裏を返せば、永々とした営みのある農山漁村や地方小都市から私たちは撤退していくべきなのだろうか。こうした考え方の背後には、人々は住んでいるところの周辺に定まって暮らす静的な主体であるという見方がある。し

かし、今日の私たちは都市と農村とをシームレスに動き回って暮らしている。また、中心部に集約をしていくという効率的な方法は、その中心部がなんらかのインパクトを受けた時に、レジリエンスが低く危険であり、再生不能にもなりかねない。それよりはむしろ、人びとが広域に動き回って暮らす、非効率ではあるが多様なサブシステムを複雑に抱えている社会のあり様を模索していく必要があるだろう。このときに、農山漁村や地方小都市の大きな可能性が見えてくる。

増田寛也ら(2014)による地方消滅論などにより、過度な東京一極集中では、わが国の総人口が急減するという指摘があってから、議論の流れが変わりつつあるように思える。地方に人々がとどまり、子育てをしていくことで、わが国の未来が変わっていく、という内容である。これらの議論を受けつつ、2014 年に「まち・ひと・しごと創生法」が制定され、人口急減や超高齢化という課題に対する解決方法の一つとして「地域社会を担う人材の確保」を掲げられた。地方への移住を積極的に展開することが地域再生の方向性として広く認識され、そうした地方創生に取り組む地域が増えつつある。しかしながら、日本の総人口は減少過程にあり、すべての地域において人口増を目指すことはできない。また、人口という定量的指標だけでは、今後の地域社会を展望することは難しい。こうした動きと呼応するように、好景気を知らない若者たちが、ソーシャルやコミュニティ、リノベーションといった言葉に反応して、全国各地で自分自身のスキルやノウハウを活かして社会貢献やまちづくりに勤しんでいる。このようなムーブメントは、若者たちが地方において、安全で安心して快適な環境に身を置き、自己の存在感を確かなものにするような、価値観の転換の表れともいえよう。しかし、若者を受け入れる地域側が、そのような状況の変化に必ずしも付いてはいてないという現実があるまいか。

ところで、高度経済成長期以降に人口移動が進み、90 年代後半から現在に至るまで、わが国では人口の約 2/3 が人口集中地区に住んでいると言われている。これらのことは、団塊 Jr 世代以降の世代のほとんどが都市に住まい、都市的生活様式しか知らないことを意味している。そしてこの団塊 Jr 以降の世代が今、子育てをしている。都市的生活様式とは、外部から運ばれてきた食料やエネルギー、水などを消費して暮らす生き方である。金魚鉢の金魚とさして変わりはない。例えば地球温暖化に伴う台風やゲリラ豪雨の激化もさることながら、伝統的な生活習慣によって手が入れられてきた農山漁村の山林にも次第に手入れが行き届かなくなり、保水力の低下が、昨今の土砂災害や洪水被害の甚大化と関係しているように思えてならない。農山漁村の資源や労働力に依存して都市部が成立してきたことを忘れてはならない。都市的生活様式しか知らない団塊 Jr 以降の世代は、本当に農山漁村を継承していく主体たりえるのだろうか。

2) 仮説

農山漁村集落の内発力はこれからも縮んでいくだろう。しかし都市部や全世界から拡散してくる外発力を取り込みつつ、集落内にそれらの魅力を凝縮していく、そのような戦略もありうる。この時、「移住」という言葉に重きを置きすぎるると、移住者数などの定量的で静的なとらえ方を指標とすることに留まってしまいかねない。都市住民の移住・交流を受け入れつつも、集落の側に議論の軸足を移し、集落の空間・社会を持続していくために、集落を質的に転換しつつ、集落が住み「継がれ」ていくありようを描く必要がある。今後30年を射程において、集落を「継ぐ」担い手の養成を、集落が戦略的に展開する必要がある。

住んでいる人には、それぞれにご縁がある。住んでいる人が多ければ、集落にあるご縁の総量も自ずと多くなる。このまま、時が過ぎ次第に住んでいる人々の数が減るのであれば、集落にあるご縁の総量も、そのまま減るだろう。これがシナリオ1である。これに対して、住んでいる人々が積極的に外部と連携して積極的に交流を展開することで、各自のご縁の量を増やして、住んでいる人々が減っても、集落の活動量（ご縁の量）を落とさないようにできるのではないかと、というのがシナリオ2である。このことで、住み継いでくれる人が現れる偶発的な可能性を広げていけると考える。

ところで、仕事を求めて移動する暮らしは、農山漁村や地方小都市には多く見られた営みであった。兵庫県北部は「丹波杜氏」「但馬杜氏」が有名である。農繁期には農業を営み農閑期には現在の神戸市灘区である灘まで出稼ぎに向かい酒造りに勤しんでいた。このように広域的ネットワークを持ち、人々は出稼ぎや行商を行い、地域を飛び越えて仕事をしてきた。いや、何も昔だけのことではない。例えば、兵庫県北部にある城崎温泉は、冬場は湯治客や松葉ガニを楽しむ観光客で、ごった返す。そこで働くために、全国各地・世界各国から冬の出稼ぎへとやってくる人がいる。21世紀の人口減少にともない経済も収縮していくのならば、人々は仕事のある場所、豊かに暮らせる場所を求めて移動するような暮らし方を、ますます選択するようになるのではないかと。団塊Jr以降の世代が都市部を飛び出し、先人達が営々として築きあげ蓄積してきた地域のさまざまな歴史的・文化的なストックを受け継ぎ活用していくことが、全国津々浦々・峰々谷々において求められよう。つまり、移住者にただ住んでもらうだけでなく、また交流相手とただ交流するだけでなく、積極的に集落の歴史的・文化的なストックに関与してもらい、保全活動や経済活動に巻き込んでいくことが、集落を「継ぐ」担い手を養成していく方法の一つとして考えられる。ワーキングホリデーや山村留学、インターン等の仕掛けも、都市部の親子を農山漁村に巻き込んでいく上で有効な手法になるであろう。そして、中長期的には彼らのその子どもたちに、郷土・国土で生きるためのさまざまな知恵を授け、経験を積ませて

いくような試みを地道に進めるべきである。金魚は放っておくと3世代後にはフナに戻るらしい。私たち人間も伝統を踏まえた新しい生活様式を、幾世代も経て創り出してはいけないものか。

21世紀の人口減少社会を眺めると、資産の流動性を高めつつ、若者にさまざまな資産や事柄について思い切って任せていく、そして自分は隠居生活をしながら第二の人生設計をおこなっていく。そうしたあり方に、さまざまな問題を解きほぐす糸口があると思える。このときの任せるべき若者は、それまでには縁もゆかりもない移住者かもしれない。そのような世代継承のあり方を再構築していく必要があるように思える。郷土や国土に広がる、余地や隙間を地域資源として活用し、融通無碍に動き回る若者を巻き込みながら往来させ、次第に定着させつつ、さまざまな責任や権限、財産や資産を早々と譲渡してしまい、彼らの子どもたちに地域の知恵を伝え、さまざま体験をさせていくような、地域の戦略を構築していくことが必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①田口太郎「地域運営組織」の担い手とヨソモノ」ガバナンス 189 巻、p30-p32、2017.1 (査読無)

②筒井伸一、佐久間康富、嵩和雄「移住者と農山村の地域づくり：田園回帰における位置付け」地理科学 71 巻(3)、p156-165、2016 (査読無)

〔学会発表〕(計 3 件)

①平田隆行、竹中匠「中山間地域における6年間の空き家動態」日本建築学会大会学術講演梗概集、2015.9

②八木健太郎「都市近郊の離島における住まいと生活環境の維持管理主体の形成」日本建築学会大会学術講演梗概集、2015.9

③木村愛莉、柴田祐「地域主体による空き家の活用システムとその効果に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集、2015.9

〔図書〕(計 1 件)

①山崎義人、佐久間康富編「住み継がれる集落をつくる 交流・移住・通いで生き抜く地域」学芸出版社、2017.8、230 項

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 義人 (YAMAZAKI, Yoshito)
東洋大学・国際学部・教授
研究者番号：60350427

(2) 研究分担者

姫野 由香 (HIMENO, Yuka)
大分大学・工学部・助教
研究者番号：10325699

遊佐 敏彦 (YUSA, Toshihiko)
奈良県立医科大学・医学部・講師
研究者番号：10507875

田口 太郎 (TAGUCHI, Taro)
徳島大学・総合科学部・准教授
研究者番号：20367139

野村 理恵 (NOMURA, Rie)
北海道大学大学院・工学研究科・助教
研究者番号：20599104

岡田 知子 (OKADA, Tomoko)
西日本工業大学・デザイン学部・教授
研究者番号：30258503

八木 健太郎 (YAGI, Kentaro)
広島大学・教育学部・准教授
研究者番号：30352222

佐久間 康富 (SAKUMA, Yasutomi)
和歌山大学・システム工学部・准教授
研究者番号：30367023

大沼 正寛 (OHNUMA, Masahiro)
東北工業大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：40316451

平田 隆行 (HIRATA, Takayuki)
和歌山大学・システム工学部・准教授

研究者番号：60362860

内平 隆之 (UCHIHIRA, Takayuki)
兵庫県立大学・地域創造機構・教授
研究者番号：70457125

柴田 祐 (Shibata, Yu)
熊本県立大学・環境共生学部・教授
研究者番号：90444562

藤原 ひとみ (FUJIWARA, Hitomi)
有明工業高等専門学校・創造工学科・助教
研究者番号：90648552